

メッセージ「パスポートはあなたの手の中に」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 4章 14-22 節

12月に入り、寒さも増して来ました。夕方に日が暮れるのも随分と早くなりました。感染者数が増え続けている新型コロナウイルス感染症は、「第8波」となり、季節性のインフルエンザと合わせて、この冬の感染拡大が心配されます。ただでさえ忙しさが増してくる12月、なかなか心穏やかに過ごすことが難しい一方で、様々なところでクリスマスの音楽が流れ、夜にはあちこちでイルミネーションが光っているのを目にすると、心和むような、ほっと一息つけるような、そんな気もしています。

子どもたちはサンタさんをお願いするプレゼントを考えている時期かもしれませんが、クリスマスはサンタさんのお誕生日ではなくて、イエス・キリストの誕生をお祝いする日です。今から約2000年も前に、なぜイエス様が人間として、最も小さな赤ちゃんとして生まれたのか。今年も、そのことに思いを馳せる季節になりました。イエス様は「暗闇の中に灯る光」と言われます。また私たち一人一人を「救うために来られた」とも言われます。それらの言葉が、現代を生きている私たちにとって、意味していることについて、改めて心に留めたいと思います。

今回の聖書のお話は、赤ちゃんイエス様の誕生の場面ではなく、成人したイエス様が宣教に出られた後、故郷のナザレの村に戻って来た時のお話でした。イエス様もナザレの村の人たちも皆、ユダヤ教徒でしたので、安息日になると会堂に行き、そこで聖書の言葉を聞きました。ここでは「巻物」と書かれていますが、当時は印刷技術もありませんし、羊の皮でつくられた羊皮紙にすべて手で書き写されていましたから、とても大きな巻物でしたし、大変高価で貴重なものでした。そのため町や村ごとの会堂にも、聖書の全巻がそろっていたわけではなく、ヘブライ語聖書の一部、一巻だけ持っているというようなこともあったようです。

この日、イエス様が会堂に行き、聖書を朗読しようと立ち上がった時には、イザヤ

書が手渡されました。ここでイエス様が読み上げたと言われている箇所は、イザヤ書の 61 章 1-2 節です。今、私たちが手にしている聖書は、原典のヘブライ語から日本語に翻訳されていますが、ここで引用されている言葉は、ヘブライ語聖書のギリシャ語訳のようです。しかし、そもそも文字の読み書きが出来た人自身が、ほとんどいなかった時代に、特別な訓練や勉強をしていなかったナザレの人々、そしてイエス様がヘブライ語やギリシャ語を読めたということはなかったのではないかと思います。そもそも会堂の管理をしていた人たちすら、聖書の巻物を読めたかどうかは怪しく、誰も読めないけれども、巻物自体は人々の目に見える「神の言葉」の象徴として、会堂に大切に保管されていたのだと考えられています。ですから、イエス様も実際には、読み上げたのではなく、おそらく幼い頃から耳で聞いてすっかり覚えていたイザヤ書のフレーズを暗唱されたのでしょう。

18 節以降です。

「主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、打ちひしがれている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」(イザヤ 61:1-2)

そして続く 21 節では、イエス様は更に、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」とも言われました。イエス様は何故、このようなことを言ったのでしょうか。一見すると、イエス様が来られたことで、「今日、このイザヤの預言が実現、成就しました」と言われているように読めます。22 節は、そのことを人々が「褒めた」とあり、喜び受け入れられたかのように理解してしまっていますが、22 節の「驚いて言った」は正しくは「いぶかしく思い、言った」であり、「褒めた」は「証した、証言した」です。ですから、人々はイエス様の言葉を聞いて「いぶかしく思い、『この人は(我々がよく知っている)ヨセフの子ではないか』と口々に証言した」というのが正しい翻訳でしょう。

というのもナザレの村というのは、人口が数百人規模の小さな村でした。お互いの顔も名前も家族構成もよく知った関係でした。きっとイエス様の生まれた時も、子ども時代もみんながよく知っていたのでしょう。そして父親のヨセフと一緒に仕

事をしていたかと思ったら、ある時、急に村を飛び出してどこかへ行ってしまった。何でもヨルダン川の下流の荒野で洗礼者ヨハネの所へ行ったとか……。そんなヨセフの息子の、あのイエスが戻って来たかと思ったら、急に立派なことを言うようになって、びっくりした。というような状況だったのでしょうか。

イエス様が言われたのは、「私によって、今まさに実現したのです」ということではなく、「このイザヤの預言の言葉は、もう既に実現しています。そのことをあなた方は今日、聞きましたね」ということだったのだらうと思います。「捕らわれている人は解放され、目の見えない人の視力は回復し、打ちひしがれ、押しつぶされている人は自由にされ、解放される」この預言の言葉を、ナザレの村の人々はどのように聞いたのでしょうか。ここで「解放」「自由にされる」と訳されている元々の言葉（アフエーシス<アフイエーミ）は、他の箇所では罪の「赦し」と訳される言葉と同じで、「釈放する」「放免する」「そのまま行かせる」という意味です。

ナザレの村の人々は、ローマ帝国への納税、ガリラヤの領主への納税、ユダヤ教の神殿への納税など、重い重税に苦しめられていました。借金のかたに先祖伝来の土地を奪われ、小作農にされた人たちも少なくありませんでした。そのような中であって、イエス様は「神の国はもう来ている。たとえエルサレムの神殿で犠牲をささげられなくても、罪の赦しも救いも、もう既に与えられている」と宣言されました。そしてそのような宣言は、まさにナザレの村の貧しい人々にとって、彼らを押しつぶし、捕えていたものから、解放することであり、自由にすること、そのための自覚、気づきを促すものであったのではないかと思います。

さて翻って、現代を生活している私たちにとって、この聖書の言葉は何を意味しているのでしょうか。私たちは今、何に捕らわれ、打ちひしがれているのでしょうか。私たちが生き生きと生きられていないとすれば、それは何故でしょうか。ストレスによってでしょうか。そうだとすれば、ストレスがたまるのは何故でしょうか。「一生懸命働くと、ストレスがたまるから、そのストレスを発散して解消するために、お金を浪費する。お金を浪費してしまうので、またいっそう頑張って仕事をする……」このサイクルは、どこかに無理があるのではないかと思います。また命と共存出来ないことが

明らかになっているにも関わらず、原子力発電所を再稼働させる動きが続いています。いつか必ず行き詰まり、破綻することが分かっているのに、どうして止められないのか。それは私たち、この社会全体が、何ものかによって常に追い立てられ、追い詰められているからでしょう。そのように私たちの命を追い立て、追い詰め、生き生きと生きられなくさせているもの、それを「悪」と言い、「闇」と言い、「罪」(外れた道)と呼ぶことが出来るのではないかと思います。

戦争、病い、経済破綻など、これまで大丈夫と思っていたものがガラガラと崩れていき、世界に闇が広がり、深まっていくように感じる中で、「ここにこそ真実がある」「本当の救いはここにしかない」というカルトの喧伝はますます大きくなっているように思います。「修行をすれば救われる」「献金をすれば天国に行ける」などと言うのは、具体的で分かりやすいですが、すべて嘘です。天の国、命の道へ行くためのパスポートは、何をしたから与えられて、何をしなかったら与えられないというものではないはずです。イエス様は言われました。「真実が見えていなかった人は見えるようになる」「悪や罪に打ちひしがれ、捕らわれてしまっていた人は、解放されて、そのまま歩めるようになる」「それらはもう既に実現している」と。

パスポートは、もう既に私たち一人一人の手の中にあります。神様によって命が与えられた時から、一人一人の手に渡されています。暗闇の中に輝く光も、一人一人の命の中に備えられています。イエス様が最も小さな赤ちゃんとして、暗闇の中に生まれて下さったことを思い、私たちも自分の中の命の灯を隠してしまわないで、外に輝き出して行きましょう。そして隣に消えそうになっている灯があれば、火を分け合い、灯し合っていきましょう。私たちにはそうすることが出来る、許されている、そして求められているのだと思います。